

インタビュー

「何となく」の理解でなく

ビジネスの現場では、言葉以外にも大切なポイントがある。

グラマシーエンゲージメントグループ株式会社
代表取締役

ブライアン・シャーマンさん



——日本を初めて訪れたのは中学生の時だとか。

ニューヨークと東京の間に交換留学プログラムがあることを知り、日本で2週間、東京・神田の一ツ橋中学校に通いました。1989年のことです。日本語はまったく分かりませんでした。人間対人間、感情でコミュニケーションをしていたように思います。「いつかまた日本に戻って日本語で話をしたい」、日本語を学ぶモチベーションになりましたね。

2度目は高校生、夏休みに東京と長野で1カ月間過ごしました。3度目は大学3年生の時に同志社大学に1年間 AKP 留学^{※注1}。大学卒業後は、日本政府のJETプログラム^{※注2}で来日し、富山県で教員、そして黒部市役所で国際交流員として勤務し、2年間の日本生活の後、2007年に再び来日現在に至っています。

※注1：同志社大学の留学生受け入れプログラム

※注2：語学指導等を行う外国青年招致事業

最初に結論を言ってほしい

——今でも日本語は難しいと感じることは？

日本語は論理的で、文法的な例外が少ない言語です。ルールさえ分かれば文章を読んで理解することはそれほど難しくありません。ただ、正しく声に出して読むのは大変です。「上回る」が「うえまわる」になってしまったり。

それと、丁寧語を使うべきかどうか迷いますね。「教えてもらった」「教えていただいた」「です」「ます」と「である」の使い分けも難しいです。日本語には形式的な言葉が多いと感じています。「いつもお世話になっております」「よろしくお祈りします」「お忙しいところお集まりいただき」……、このあたりの上手な使い分けは、外国人には期待しない方がいいでしょうね。

——よほどくだけていない限りは大丈夫ですよ。ところで、外国人とのコミュニケーションで日本人が注意しておくことは何だと思いませんか。

ロジックの運び方が日本語は「起承転結」、結論が最後に来ます。これに対して異文化コミュニケーションでは、結論を最初にもってくるのがお勧め。結論が最後だと、相手が何を言いたいのか最後まで聞かないと分からない。論点を捕まえるまでが大変で、忍耐が必要になります。

繰り返して明確にした上で確認

日本企業に勤めていた時に大きな会議がありました。外国人の私には分からないことがあったのですが、後で出席していた日本人の同僚に聞いたら「私にも分からない」って(笑)。

分からないことがあれば聞き返すという Responsive Speaking が大事です。「何となく」理解して終わらせてしまっていることがないで